# EXILEも驚く子供の覚醒

Next ストーリー
踊る日本人
③

## 必修10年「かっこよさ」意識

学校でダンスが必修化されて早10年。いつしかテレビでもダンス企画が催され、高齢者もダンスを楽しむようになった。日本人の変化をダンス&ボーカルグループ「EXILE」のメンバーは肌で感じてきた。

スマートフォンの目覚まし音とともに音楽が流れ、画面ではEXILEのTETSUYA（40）が踊り出す。背伸びや歯磨き動作など朝のルーティンを取り入れた「おはようダンス」。寝具メーカーの西川（東京・中央）が子供たちに正しい睡眠習慣を促す活動の一環として、TETSUYA監修のもとに作られた。

ダンスの教育的側面を重視してきたTETSUYAさん。学校現場に赴くことも少なくない＝本人提供

### ライブ客も踊る

TETSUYAは「ずっと教育と健康を重視してダンスにアプローチしてきた」自負がある。2013年からNHKの「Eダンスアカデミー」に出演し続け、17年に早稲田大大学院スポーツ科学研究科を卒業。20年4月からはダンスを学びながら高卒資格を取得できるEXPG高等学院の学長も務める。

EXILEのライブ風景も変わった。手拍子や歓声が中心だったのが、最近は客も踊る。TETSUYAは気づいた。「本能的に踊りたい子、興味がある子が多い。子供に限らずダンスを見る機会がすごく増えた」

自身の子供時代、ダンスとはほぼ縁がなかった。中学までは水泳での五輪出場を目指し、その後はスケートボードなどを楽しんだ。19歳で人気歌手のバックダンサーを務めた地元の先輩の踊りを見て世界が変わった。

09年からEXILEとして活動。11年の東日本大震災後は被災地を回り、グループの存在の大きさを痛感した。「何十年も残さないといけない。そのためにも自分の経験を後輩にわたす教育が必要だと思った」

11年は小学校でダンスが必修になった年。ダンスパフォーマンス教育の可能性にのめりこんだ。NHKでの経験は修士論文「必修化以降の中学校における現代的リズムのダンス授業の現状と処方箋」に反映された。

「12年に中学校でダンスが必修になり、困っている先生たちからメッセージが（番組に）寄せられた」。教員のための教材作りを提案して締めくくると、長野県知事の目にとまった。同県教育委員会と連携して作ったダンス映像教材は文部科学省にも認定されている。

「ダンスには人生に必要なものが全部詰まっている。日々鍛錬しないとうまくならないし、仲間と踊るにはコミュニケーション能力が必要。その魅力を世の中に伝えたい」

### 初心者が楽しく

ストリートダンス協会によると、ダンスを競技として行う国内の競技人口は推定約600万人。野球やサッカーよりも多い。ヤマハミュージックジャパンが16年に発表した、小学生の子供がいる25～60歳の親世代に実施した意識調査では、ダンスを習う割合が親世代に比べて子世代が約5倍という結果が出た。

必修化当初、学校への出張授業などを行う日本ストリートダンススタジオ協会には問い合わせが殺到した。指南したのはボックスステップといった基本動作と「初心者が楽しく踊れるダンス」だ。これまでに指導した小中学生は約36万人。「子供たちも『かっこよく踊りたい』という意識が強くなってきたし、全体的に理解度が進んできた」とスタジオ協会事務局長の寒川和成は話す。

生涯にわたって運動やスポーツに親しむのに必要な素養と健康・安全に生きていくのに必要な身体能力、知識などを身に付けること――。文科省は体育の目的をこううたう。その点、ダンスはケガのリスクが低く、年代や場所を問わず幅広い層が楽しめる。寒川らは16年からシニア向けダンス教室を展開。認知症予防プログラムにも関わる。

「ダンスの可能性は広がっている」と実感する。

その思いはTETSUYAも同じだ。「ダンスであふれた老人ホームをつくりたい。ダンスと音楽って一生楽しめるものなので、それが健康につながるようにしたい」

日本人にとって非日常的だったダンスとの距離がぐっと縮まったこの10年。TETSUYAはこう考える。「（全国各地に）お祭りがあるように、もともとは日常的に歌や踊りが行われていてDNAとしてあった。ダンスを見る機会が増えたことでそれが呼び起こされたのでは」

＝敬称略

（堀部遥）

掲載日 2021年12月16日 日本経済新聞 夕刊 3ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。